慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 寺前典子著『リズム (身体感覚) からの逃走 : 音楽の現象学的・ 歴史社会学的研究』晃洋書房、2018年
Sub Title	
Author	岡崎, 宏樹(Okazaki, Hiroki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.170- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

寺前典子著『リズム（身体感覚）からの逃走――音楽の現象学的・歴史社会学的研究』晃洋書房、2018 年

岡崎　宏樹

音楽は社会学的に研究するのが難しい領域である。というのも、音楽は特定の社会的条件のもとで成立しているけれども、社会秩序から自律した象徴体系として展開するからである。「歌は世につれ世は歌につれ」というのは音楽の流行についてであって、音楽の構造と社会の構造は直接的な対応関係にはない。だから音楽を社会学的に研究する場合、音楽に関する言説を分析したり、音楽の組織・集団・ファンを調査したり、メディアや権力と音楽の関係性を考察するなどのアプローチが取られてきたのである。このように音楽そのものを問うのは音楽学に任せ、その周辺を研究することで、社会学が重要な知見を手にしてきたのは確かだ。けれども、音楽の分析にふみこまない音楽社会学のスタンスに、どこかものたりなさを感じる人もいるだろう。そのような人にぜひ手に取ってほしいのが、本書『リズム（身体感覚）からの逃走』である。

本書は、音楽コミュニケーションが近代的な様相を呈するまでの過程を、現象学的・歴史社会学的に論じたものである。もとになっているのは、著者が 2014 年に慶應義塾大学大学院社会学研究科に提出し、同年に学位を授与された博士論文「音楽のコミュニケーションに関する現象学的・社会学的研究」である。

本書の章タイトルは以下の通りである。

序章「問題設定」
第一章「音楽コミュニケーションの原理」
第二章「疑似同時的な音楽コミュニケーション――西洋音楽の記譜法の合理化と普遍時間を得る技法、リズムから拍子へ――」
第三章「楽器と音律の合理化における〈身体感覚〉の変遷――合理化の二側面――」
第四章「演奏空間の変容と近代的な音楽コミュニケーション――作曲家・演奏家・聴き手の分化、共同体・間を結ぶ時間――」
第五章「現代的な音楽コミュニケーション――永続性をめざす記譜法の技法から録音再生技術へ――」
終章「音楽コミュニケーションの歴史社会学――リズムと拍子、身体感覚の側面と機械的な側面――」

岡崎宏樹「書評：寺前典子著『リズム（身体感覚）からの逃走――音楽の現象学的・歴史社会学的研究』」『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）170-173 頁

では、本書の内容を構成に沿って確認してゆこう。

序章では、「音楽コミュニケーション」「音楽合理化」「リズムと拍子」という基本概念が説明され、音楽コミュニケーションを現象学的・歴史社会学的に研究するという問題設定が示される。

第一章では、「直接世界」における「同時的な音楽コミュニケーション」をシュッツの現象学的社会学とフッサールの現象学を用いて検討し、音楽コミュニケーションの原理が論じられる。「同時的な音楽コミュニケーション」の基礎にあるのは、シュッツのいう「相互に波長を合わせる関係」であり、演奏者同士や演奏者と聴き手の身体的同調として現れる。これを可能にしているのは、心拍という「根本的な賦課的関連性」（シュッツ）に働きかけ、他者経験の受動的連合「対比」（フッサール）を導く「リズム」であるとされる。

第二章では、西洋音楽の記譜法の合理化の過程を、社会の時間意識の変容と関連づけて検討し、時空間を異にする他者間の「疑似的な音楽コミュニケーション」が記譜法のどのような技法によって成立しているのかが示される。記譜法の合理化は中世の修道院に始まる。10 世紀の「ネウマ記譜法」は詞の意味とリズムを重視するものだが、これを使って歌うことで、「われわれ」関係にある人びとの「同時性」の経験がもたらされた。11 世紀頃、「オルガヌム」と呼ばれる多声音楽が生まれると、それを記す「定量記譜法」が考案され、17－18 世紀には「近代記譜法」が発明された。「近代記譜法」では、絶対的時間をもつ「二分法の音符」、音楽を「拍子」で機械的に区切る「小節線」が記される。こうした記譜法の合理化は、著者によれば、「われわれ」関係にない、「同時代世界」や「先代世界」の他者との疑似同時的な音楽コミュニケーションのために、生きた流れとしての「リズム」が徐々に区切られ、「拍子」という普遍時間へと至る過程である。

第三章では、楽器の合理化と音律の合理化の過程が検討される。ピュタゴラス音律は〈身体感覚〉が導く純正な音程であり、微小音程「コンマ」を伴う。近代西洋は、楽器の合理化とともに、整律によってコンマを割り切るという音律の合理化を進めた。オクターブを合理的に 12 に分割する「平均律」で調律されたピアノは、大量生産され、近代西洋で揺るぎない地位を獲得する一方、純正な音程を犠牲にする非合理を生じさせた。これが「合理化の二面性」である。ウェーバーがピアノに着目して論じた論点であるが、興味深いのは、著者がフルートの合理化を取りあげて比較検討していることである。フルートも平均律で調律されるようになったが、ピアノと異なるのは、息という〈身体感覚〉で音程を調整し、純正な音調を保つことができることである。

第四章では、記譜法・楽器・音律の合理化をふまえ、修道院から宮廷、サロン、コンサートホールに至る演奏空間の変容の過程が論じられる。音楽の合理化は修道院に始まるが、この段階では作曲家・演奏者・聴衆は未分化であった。コンサートホールでは、職業的演奏者の音楽を集中して聴取する「近代的聴衆」が生まれ、作曲家・演奏者・聴衆が分化した。さらに、近代記譜法で書かれた大編成の交響曲、演奏空間の規模の拡大、大音量が出るよう改良され、平

均律で調律された楽器など、いくつもの近代的条件がそろって、コンサートホールの「近代的な音楽コミュニケーション」が成立した。これは生きた流れとしてのリズムが区切られて「拍子」という普遍時間へと至る過程であり、事象の機械的側面が〈身体感覚〉の側面を凌駕する過程である、と著者は考える。

第五章では、作曲、聴取、伝達において電気的なテクノロジーが介入する「現代的な音楽コミュニケーション」がいくつかの事例を参照して検討される。電子音楽は生きたリズムをもつクラシックとは異なるが、「無限」や「反復」という考えは近代西洋の合理化の考え方の延長線上にあるといえる。また、デジタルコンサートはサイバー空間に疑似同時的な音楽コミュニケーションを成立させるが、こうした現代的事例も、リズムが拍子によって区切られ、機械的側面が〈身体感覚〉の側面を凌駕する、「近代西洋音楽の合理化」の延長戦にある事象として把握される。

終章では、各章の議論が振り返ってまとめられる。「結語」で著者は、われわれが演奏会場に足を運ぶのは、「生きたリズム」、「音楽の原初的なあり方」を体験するためであるとし、次の一文で本文を閉じている。「情報化はますます進展するが、われわれは、結局、対面状況の『同時的なコミュニケーション』において、音楽の原点へと回帰するのである」（p.178）。

以上で本書の内容を確認したので、以下では評者の感想を自由に記すことにしたい。

最初に述べたように、音楽は自律的な象徴体系として存立するため、正面から社会学的に研究するのが難しい。シュッツの音楽コミュニケーション論とウェーバーの『音楽社会学』は、社会学にとって希少な理論的遺産である。著者は、これら巨人たちの仕事をただ紹介するのではなく、音楽演奏を作曲家・演奏者・聴き手のコミュニケーションとして把握したシュッツの仕事と、音楽の合理化と近代社会の合理化の関係を問うたウェーバーの仕事を「音楽コミュニケーションの合理化」という観点で接続し、音楽史や音楽学の資料を活用することで、独自の「音楽の現象学的・歴史社会学的研究」を展開している。シュッツとウェーバーを基礎に置いている点で「正統派」の音楽社会学の成果であるが、社会学理論の知見だけでなく、楽典に関する深い理解やフルート演奏者としての豊かな経験があってこそ書かれた著書である。この分野に関心を寄せる人の基本図書になると思う。

一方、こうして議論の起点が与えられたことで、さらなる理論的課題が見えてきたようにも思える。シュッツの音楽コミュニケーション論はきわめて一般性の高い理論である。これに対し、ウェーバーの合理化論は西洋近代を説明する理論である。本書が考察対象としているのは音楽全般の歴史ではなく、西洋クラシック音楽の歴史である。ゆえに、本書が提示しているのは、クラシック音楽に定位した場合に見えてくる西洋音楽の合理化である。その意味で、広い歴史的視野を有するとはいえ、本書の議論は、いまだ個別的・限定的であり、現代的な音楽コミュニケーションの総体を説明するものではない。試しに、ジャズ、ブルース、EDM といったポピュラー音楽の事例を取り上げてみよう。

ジャズのリズムの基本はスウィングと呼ばれる。スウィングは、連続する２つの８分音符を、

二つ目を一つ目よりも長く演奏するが、その長さの幅は、楽曲や演奏者によって異なり、近代記譜法で正確に記すことができない。スウィングは体験的に習得しなければならない。ジャズはつねに〈身体感覚〉とともにあり、リズムから逃走することはない。

ブルースの音階はブルー・ノート・スケールと呼ばれる。長音階の楽曲の場合、第３音、第５音、第７音を半音下げた「ブルー・ノート」の音が使用される。ブルース歌手やギタリストたちが関心を向けているのは、正確に半音下の音程を演奏することではなく、音の下げ方を微妙に調整し独特のニュアンスを表現することである。聴衆はそうしたサウンドの「割り切れない味わい」を楽しむ。ジャズやブルースは、西洋音楽とアフリカ音楽の出会いから生まれたといわれるが、本書からはアフリカの響きが聴こえてこない。

EDM（エレクトロニック・ダンス・ミュージック）は電気的なテクノロジーを駆使した音楽であるが、その目的は踊らせることにある。世界中のディスコ、クラブ、レイブで、人びとが機械で創られたサウンドに身をゆだねてダンスし、熱狂する様をみれば、機械的側面が〈身体感覚〉を促進しているようにさえ思えてくる。

このように、現代的な音楽コミュニケーションには合理化図式ではうまく説明できない現象が含まれる。むろん、こうした問題に気づかせてくれたのは本書のおかげである。

最後に、本書のリズム概念について評者の立場からコメントしておきたい（評者のリズム理解については拙稿「リズム論的思考(1)――社会学とクラーゲスのリズム論」『Becoming』34, BC出版, 2015.を参照）。著者はリズムを「生きた流れ」として把握し、これを区切るのが拍子であると解釈している。だが、リズムも分節化と反復の形式なしには経験されない。その意味で、リズムは「流れ」ではなく、「流れの形」である。ジンメルに倣って言うならば、リズムは生そのものではなく、生の形式である。形式は生を拘束し制限するが、生は形式を通して自己を表現することができる。同様に、リズムが規則的な拍子という形式を通じて自己を表現し、「生きた流れ」を経験させることもある。

実を言えば、第二章３で「記譜法をめぐるシュッツとアルヴァックスの見解の相違」を検討し、「意識の流れ」と「社会的枠組」の関係を問いつつ、「リズムと拍子」の「両側面の協働」（p.80）の可能性を論じたとき、本書はこの「生と形式」の問題に逢着していたように思われる。こうした点をさらに掘り下げることで、合理化や機械化が進展する中でも「生きたリズム」が探求される理由が見出されるのではないだろうか。このように、一歩先の思索へ導く力を持った本書はきわめて刺激的で示唆的な作品であると思う。

（おかざき　ひろき　神戸学院大学現代社会学部）